

浄土

monthly
JODO
1996・8



1996 8 August

法然上人鑽仰会・発行



咲いたら、幸せ。

楽しい、嬉しい。

ちょっと切ない、なつかしい。

いろんな話をしたり、聞いたり。

そんな何気ないことが、人と人との
固い絆の第一歩。

それぞれの人の、それぞれのお話に
花を咲かせるお手伝い。

安い市外電話の、0088です。

日本を楽しくする電話

0088

お問い合わせ・お申し込みは、日本テレコムお客様センターまでお気軽に。

 **0088-82** (無料)

または 0120-0088-82

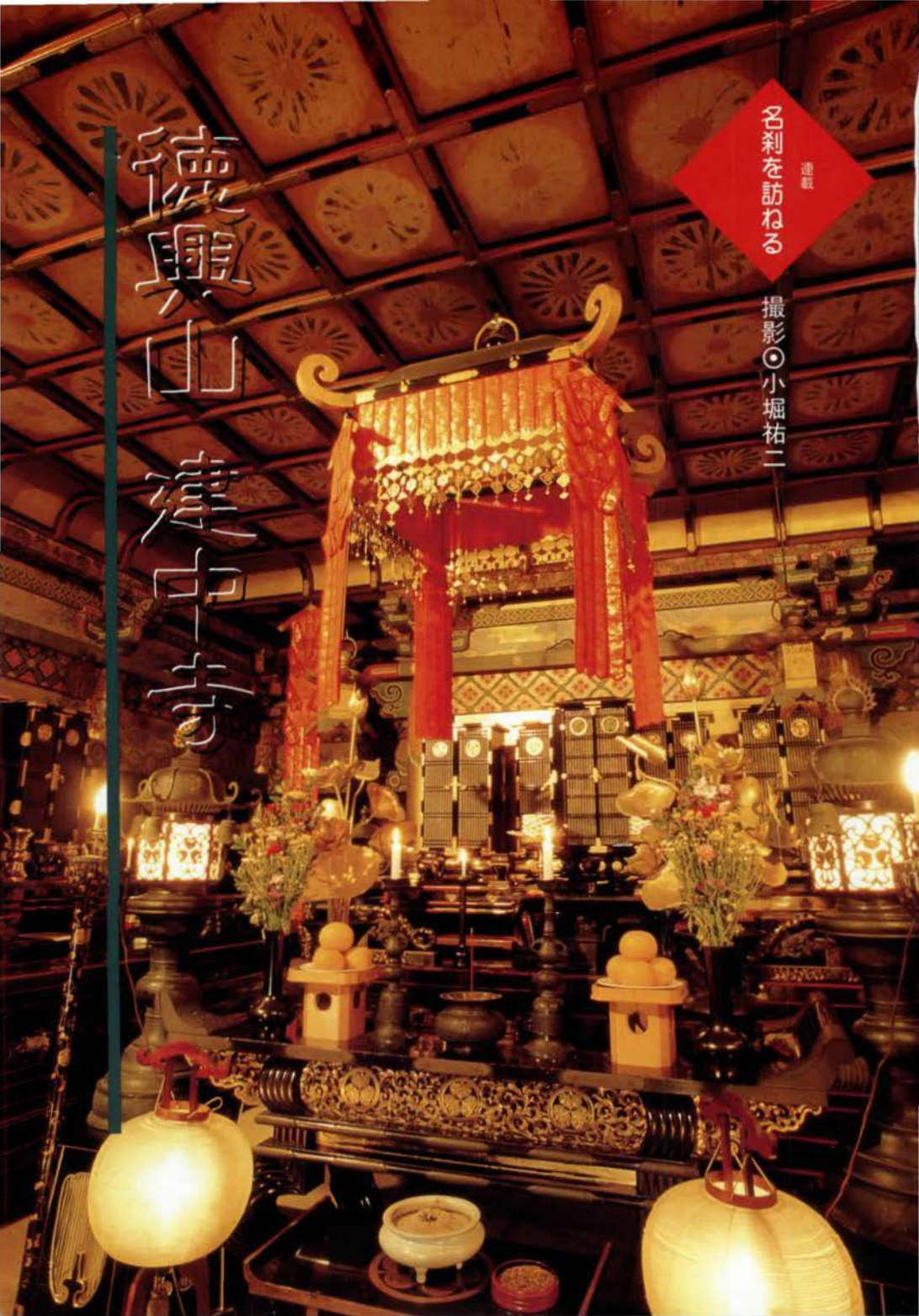
●受付時間 9:00～23:00 (年中無休)

徳興山建中寺

名刹を訪ねる

連載

撮影◎小堀祐二





御霊屋の天井は見事な
装飾がほどこされている

山興寺 徳建中



御霊屋へはこの門をくぐって入る

山門から見た鐘楼と経蔵





徳興山建中寺第三十五世住職、
村上賢瑞上人。書院玄関前にて



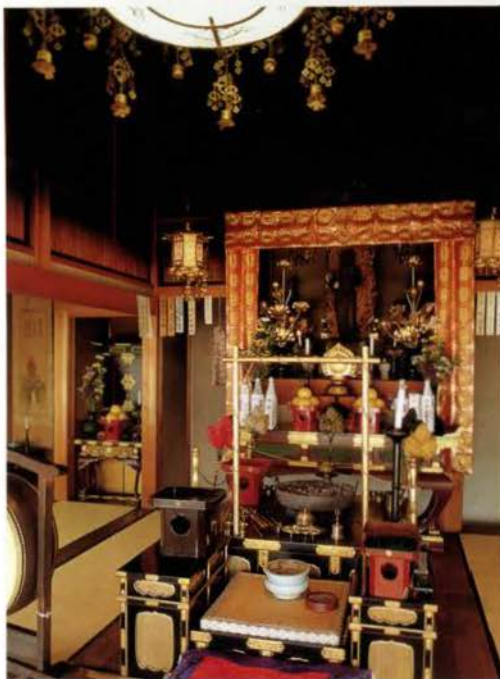
経蔵から見た山門(左)と
不動堂(中央)と開山堂(右)



徳興山崇仁院建中寺、尾張徳川家の初代義直公の菩提をとむらうために一六五一年に、茨城県結城市弘経寺の成譽廊呑上人を招請して開山された。五万坪(16万5千㎡)の境内には諸堂数数十棟が建立された。しかし、伊勢湾台風で二百本近い境内の松が倒れたり、戦争などでいくつものお堂が消失した。また終戦直後は戦争で家を失った人々の避難場所となったり女学校が本堂を校舎に使うなど、苦難の時期も短くはなかった。

現在も当時の総門(総樺造)、山門(総檜造)のほか四脚門も残り、その寺格の高さを今に伝えるほか、不動堂、開山堂、経蔵、鐘楼、書院、そしてお坊さんの修行場所などに使われる徳興殿、地域一の広さを誇る本堂、尾張徳川家の先祖を祀る御霊屋が並ぶ。また山門楼上の釈迦牟尼仏と十六羅漢、経蔵の十三宗の開山上人の木造、五千八百巻のお経を収める輪蔵、徳川家代々の秘仏で厄除け開運、交通安全に靈験あらたかな不動明王と、数々の寺宝が残る。

幼稚園の運営や、徳興会と呼ばれる建中寺の後援会を中心に各種行事も催されるなど、地域密着の寺だ。



不動堂では近くの真言宗の
僧侶に護摩を焚いてもらう。
開帳は12年に一度、酉年に

徳興山 建中寺

修行僧が歩く徳興殿から本堂へ続く廊下



律師養成講座(お坊さんの育成道場)
に使われる徳興殿



浄土

1996/8月号 目次



カラーグラビア 連載<名刹を訪ねて>.....写真=小堀祐二	3
沖縄の清明祭	山本有綱 8
法然上人と比叡山黒谷青龍寺.....	天野信浩 16
御法語に聴く	22
表紙は語る 野草・花ごよみ.....	石井敏之 27
名刹を訪ねる 建中寺	真山 剛 28
コラム	37
外国で暮らして.....	西村実則 38
コラム	45
続・午後の日差しの中で	吉川英明 46
コラム	53
Jフォーラム	57
事務局便り	68
編集後記	70

表紙題字=浄土門主 中村康隆親下

表紙撮影=石井敏之

アートディレクション=近藤十四郎

沖繩の清明祭
その変貌

山本有綱

沖縄では僧侶のことをボージーという。本土の皆さんには信じ難いことだと思うが、清明祭は勿論、お盆にもボージーの出番はない。出番がないから、清明祭やお盆を、誰がどこでどんなふうに行なっているか、全く見聞の機会がない。見聞していないことについては、わかりやすくもおもしろくも書きようがない。難題というほかない。難題ではあるが、折角の編集部のご下命のことだから、おぼつかない菅見仄間をたよりに（鶴を白だと伝える過ちをおかすことになるが）最近の清明祭の変貌を中心に、沖縄本島南部地方の祖先祭祀の現状の二、三を綴って責をふさぎたい。

沖縄にも、かすかな四季のうつろいはあって、晩春から初夏のころ「へうりずん」といわれる、もっとも過ぎやすい好季を迎える。「へうりずん」は旧暦の「清明の節」とほぼ重なる。この時季、ご先祖さまも、じつとしておられなくなるのだろう。しきりに此の世に示現される。示現されれば祀らなければならない。「清明祭」である。

「沖縄ではお墓で宴会をやるそうすね」と本土の方によくたずねられる。お墓で宴会をしているのではない。ウサンデー（後述）という清明祭の大切な行事を行なっているのである。前段には「神御清明（カミウシミー）」という清明祭の本番ともいべき真摯な祖先祭祀の儀礼が行われる。

「神御清明」は、「清明の節」の入りの日に行なわれるのが本来である。しかし現在ではいろいろな事情から、ぼかぼかと陽気のよくなる四月の、それも日曜日が祭日をえらんで

行われることが多いと聞く。

当日は、ムンチュー（門中、後述）を構成する者が費用を出し合ってムトーヤー（宗家）で先祖に供える料理をつくり、女性の神役や各家代表の男たちが集って、門中とつながりの強い墓を巡拝する。このときウサンデーといって、お供えのご馳走をご先祖さまと一緒にいただく。時にご先祖さまと泡盛の献酬もあらうから、通りすがりの観光客には、お墓で宴会をやっているように見えるのだろう。当人たちは、いたって大真面目にご先祖をもてなしているのである。

巡拝する門中墓には、トーシー墓という、現在使用中の墓と、アジシー墓とよばれる遠い祖先を祀つてある墓とがある。アジシー墓はフニシン（骨神）ともいわれ、ここに祀られているのは、三十三回忌を過ぎて神格化された遠い祖霊である。以上がこれまで行われてきた「清明祭」のあらましである。

少し余談になるが、ここで、沖縄でもっとも今日的な話題「門中墓」のことにふれておきたい。

このところよく新聞のお知らせ欄で「お墓シンポジウム」開催の記事を見かける。ご先祖様の邸宅、門中墓に対する関心は、沖縄の人たちにとって大変強いのである。五月初旬地元新聞が見ひらき二頁をつかつて「沖縄お墓シンポジウム」の模様を特集していた。タイトルは「沖縄のよき伝統 門中墓、積極的に公的墓地整理を」となっていた。基調講演は、「墓地を公園などの複合施設に——住民地域との間に鑑賞緑地を」基調報告は「墓と

都市の共存をどう図るか——限られた敷地で新たな課題」このシンポの効果として主催者は、悩みや課題がより鮮明になって受け皿の必要性が浮き彫りになったとし、地域で異なる墓の習慣というテーマでの発言者は、行政の縦割の弊害を指摘し、門中墓を現代化して一族墓を提案している。まさに百家争鳴であるがそれだけ沖繩の人々にとって、門中墓の問題はいろいろな意味で深刻だし、関心も強いのだろう。何分、門中墓は、祖先祭祀のよりしろだし、精神的支柱でもあるからである。何よりも「清明祭」の舞台なのである。「破風型」「亀甲型」などなどの門中墓が遠近の山野に点在する風景は、もともと沖繩らしい景色でもある。

余談の余談になるが「墓地埋葬法」という、古くてイカめしい法律があって、門中墓といえども建造には、県知事の認可が必要である。所管は保健所の環境衛生係となっていて、申請者は宗教法人の資格が必要である。この宗教法人の名義貸しをめぐって、お墓業者の間に、熾烈な競争が起こる。浄土寺にも、名義を貸してほしいという申し込みが何件あった。現在某業者と交渉中である。

わき道にそれたが、門中によつては、トーシー墓や、アジシー墓が必ずしも同じ場所に建っているとは限らない。時に、門中の多くが住む部落から遠く離れた山野に在って、かなりの道程を歩かなければならないこともある。場合によつては車を利用しなければならぬ。折りしも「へうりずん」の好季、行楽的気分にもなろうというものである。又、門中

を構成する家庭の都合の如何では、日時をきめて門中揃つてということとはむずかしいという事情もあつたりして、このごろでは家族単位でお墓詣りをするという、本土のお彼岸やお盆のお墓まいりとかわからない清明祭になつてきている。

沖繩には、清明祭とは縁由も意味あいも別であるが、「浜下（ハマウ）り」または、「三月遊び（サングアチアシビ）」と呼ばれる、部落単位或は職場単位で行われる仲よしグループの女性たちの行樂的娛樂行事がある。本土の各地に戦前までのこつていた三月の節句の山登りに似た行事である。近ごろではこの「三月遊び」と「清明祭」とが一緒になつて新しいスタイルの清明祭も行なわれるようになってきた。元来、清明祭は門中単位で行なわれるべきなのだが、門中自体の変容によつて、部落や町内会単位で行われる「三月遊び」との垣根が低くなつて新しいスタイルの清明祭が一般的になつてきた。「清明祭」の変貌である。

或る自治会の新しい「清明祭」をスケッチしてみよう。（多分これからの清明祭はこんな風に変わるであらうという予想の部分もあるが）

その日は、朝早くから数人の婦人たちが集つてご馳走を重箱（ジューバク）につめた供え物を用意した。大きな丸盆に色とりどりのまんじゅうも盛った。行事は自治会館の近くの拝所（ウガンジ）〈祠〉を拝むことから始まった。だんだん人数が増え、次なる拝所へと向かった。みんなウキウキしている。拝（ウガ）みがすむと、太鼓の拍子に合わせてカチヤーシーが踊られた。その後も門中の墓や火の神を祀る拝所で祈願が行われ、その都度に

ぎやかにカチャーシーの円舞が繰りひろげられ、一連の拌みは終了した。

やがて自治会館に移動して、ご馳走をかこんで宴となり、班ごとに練習された余興で盛りあがる。こうして夕刻過ぎまで、しばし家事を解放された女たちのソプラノの笑声がひびきわたった。珍しい例ではあるが大体これが現代版「清明祭」である。

清明祭の主役であった門中の男たちは、いつの間にかシマ（部落）の女たちにとってかわられ、本土の皆さんには奇異に見えたであろうお墓の宴会は影をひそめるのである。

沖縄の「門中」とは、始祖を共通にし、父系血縁を通じて結びつく親族集団である。当然「門中墓」を共有し、門中墓の維持と祭祀は、門中の重要な機能であり役割でもある。

門中を構成する単位の家の継承——それはトートーメーといわれる先祖の位牌を継承することを意味するが、長男優先の父系血縁を原則とする。

本土の家庭では、次三男や婿養子、場合によって女性による相続が行われるが、沖縄の門中では、家に男の子がいない場合、同じ門中のできるだけ近い血筋から継承者がえらばれる。この原則がトートーメー継承の場合では、タチイマジクイ（他系まじわり）チャツケウシクミ（嫡男押し込め）その他のタブーとなって、しばしば、家の相続問題の争いの原因となる。家を継承することとは、単に家名の相続ではなくて、トートーメーを守る原資となるその家の資産を相続することを意味するから、争いは深刻で、時に法廷に持ちこまれることになる。女性差別だという声も喧噪しい。

（トートローマーを拝むことをウトートローという。だから、ウトートロー トートローマーとは、祖先を拝む意である。因に、沖縄のトートローマーは、私たちのアミダさまなのである）

こうした門中制度も、シマといわれる地域共同体の社会的変化によって次第に崩れつつある。特に最近の少子化傾向は、沖縄とても例外ではなく女の子だけの家庭も珍しくなくなり、どうかすると、男の子一人つきりで、とても他家を継ぐどころでなくてはなくなってきたのである。こうした現象が、徐々に門中制度を解体し、やがて垣根の低くなったシマ（地域共同体）へと吸収されていく。門中の解体は、多くの祖例祭祀の伝統や、風習を失うことになる。「清明祭」もまたそうである。なんとも惜しい気がする。古式ゆかしい昔ながらの「清明祭」には、もう再会できないのではないか。かわって近ごろでは、前述したように、自治体単位の浜下りと一緒になった清明祭や、家族単位のお墓参りに様子がわりしてきている。

沖縄のお盆についてまでふれる余裕を失ったが、沖縄のお盆は、本土各地のお盆風景とは趣を全く異にする。棚経の習慣もないし、寺施餓鬼もない。冒頭に書いたように、ボージーの出番は全くない。本土とちがってお盆はむしろボージーにとっては閑な季節ということになる。沖縄の祖霊祭祀は、旧暦でいともなまることが多い。お盆も例外ではなく、先ず、七月七日タナバタと称してお墓の掃除をする。祖霊を迎える子孫の心意気である。ついで十三日ウンケー（お迎え）といって、ご先祖を丁寧にお迎えする。そして、ウーク

イ（お送り）を十五日、いずれも家族中心に、その家のしきたりによって行われる。他家にかたずいた兄弟など、多少の往来はあるようであるが、寺とは無縁だから、うかがい知る由もない。

総じて沖縄は、地理的歴史的事情から中国の影響を強く受けてきた。特に祭祀儀礼などがそうである。さまざまな祖霊を祀る儀礼が冊封使などによって首里の王府にもたらされ、やがてそれが地方へと伝播されていく。そして年月をかけて、沖縄風にアレンジされて受容され、沖縄独自の清明祭やお盆の風習が育ってきた。

戦後のしばらくは、アメリカの占領下におかれたことから、クリスマスの行事なども行われるようになり、本土復帰後は、戦前の縁をたよりに仏教の各派が入ってきてこんどは花祭りも行われるようになった。浄土宗もおくればせてはあったが、四、五のお寺ができ、新宗教も盛んに流れこんで、本土とは一風変わった、しかしわめて沖縄的な新旧入り交った祖霊祭祀の習慣が醸成されつつある。

まばゆい光と、あおい海とに育まれてきた「清明祭」や「お盆」の沖縄の祖霊祭祀の伝統と行事が、今、大きくかわろうとしている。しかし明るくてなごやかで、ゆつたりとした沖縄らしさだけは残ってほしいと願わずにはおれない。

（沖縄・浄土寺住職）

法然上人と

比叡山黒谷青龍寺

特別寄稿

天野信浩

滋賀県と京都市にまたがり聳えたつ峻険、雄大な山岳が比叡山である。後に鎌倉仏教を開かれる各宗派のお祖師さまが、若き日この比叡山で学問修行に励まれた。そのことから比叡山は日本仏教の祖山とも呼ばれている。その比叡山の山深くに西塔黒谷という地がある。

この西塔黒谷こそがまさに浄土開宗の地なのである。

法然上人が十八歳から四十三歳までの二十五年間、修行に学問に明け暮れられた聖地なのである。浄土宗にとって最も大切な聖地なのである。

この聖地は、総本山知恩院管理の下、約二十年、一人の老尼の手によって守られていた。しかし、高齢のため昭和六十二年の冬を最後に下山された。しばらくの間、比叡山黒谷青龍寺は無住となっていた。

その老尼の後任として、私が、比叡山黒谷青龍寺へ登嶺することになったのである。私が登嶺したのは昭和六十三年七月三日であつ

た。これより約三年間、私は法然上人がお側にましますがごとく、お慕い申し上げ、お給仕させて頂いた。このことを思い出すたびに何とも懐かしく胸を熱くするのである。

比叡山には、昔から「論・湿・寒・貧」という言葉がある。比叡山のニックネームのようなものである。湿気がひどく、冬の寒さの厳しい山坊に籠居し、清貧にあまじつつ、学問論議に励むという意味である。まさに、比叡山の自然環境、修行の様子を表わした言葉といえる。

私が黒谷青龍寺で御奉仕させて頂いていた時、私の部屋の片隅に一台の除湿機が置かれていた。五十分一時間、除湿機のスイッチを入れていただけでバケツ一杯ほどの水が溜まった。それほど湿気の多い湿度の高い御山なのである。そして、比叡山は標高、平均七百八十メートルという高い御山であり、比叡山独特の山岳気候、お天気の移り変わりも激しかった。

早朝、からりと晴れ渡った快晴に近い天気

であつても二十分も経たないうちに厚い雲が張り出し激しい雨が降りだす。ひとたび雨が降りだすとあたり一面深い深い霧に覆われてしまふ。霧に視界が遮られ五十センチ先が、いや三十センチ先さえも見えなくなつてしまふのである。

私が黒谷青龍寺に御奉仕にきて二年目の秋を迎える頃であつた。

ある日、黒谷青龍寺に比叡山籠山行の行者さまが訪ねてこられた。このような機会は二度とないと、ある質問を試してみた。

「この比叡山で一番恐ろしいもの、恐いものとは何ですか？」

私は、ある程度こういう答えが返ってくるのではないかと予期して質問してみた。というのも、以前、私が知恩院の用事で山を下りた。用事を済ませ友人の運転する車で帰路につく頃には、すっかりと日が沈みあたりは暗かった。比叡山ドライブウェイを走る頃には雨が降りだし、あたり一面深い霧に包まれてしまつた。霧のため車は青龍寺までの山道を

通ることができず、ドライブウェイから約三キロの山道を小さな懐中電灯の明かりを頼りに一人歩くことになつた。「一寸先は闇」という言葉があるが、懐中電灯の明かりのとどく僅かな空間しか見えない。懐中電灯に照らさだされる世界は昼間とは別世界である。昼間一本道であるはずのこの山道に幾重もの獣道が写し出される。「一体どの道が青龍寺への本道なのだろうか？」と心に不安が過つた。その時、突然、大きな野鹿が目の前に飛び出してきた。私は驚き肝をつぶしてしまつた。

そんな経験から、同じ様な答えが返ってくるのではないかと期待し行者さまに「比叡山で一番恐ろしいものとは何ですか？」と質問したのである。

しかし、行者さまは、「比叡山で一番恐ろしいもの、それは湿気ですよ。湿度ですよ。」とおっしゃつた。更に話を伺つてみると、「御山の長い長い籠山行が終わる頃には、湿気のため身体がぼろぼろになってしまうのだ。酷い人になると湿気のために肺にいくつもの穴

が空いた状態で山を下りていられる方もあるのだ」とお聞きしたのである。

ある書物の中に「比叡山龍山行歴代記録」というものが記されていた。それを調べてみると「元禄十二年（一六九九）二十五歳 龍山年数四年途中病死。享保八年（一七二三）三十七歳 龍山年数八年 途中病死。宝暦二年（一七五二）四十六歳 龍山行満行後死亡」と拾い読みをするだけでも比叡山の湿気、湿度の恐ろしさを知ることができる。

法然上人は晩年「おこり」という病を患われた。現在のマラリアの様な症状になる熱病である。この熱病にかかり一進一退の病状になられ、付き添うお弟子さまたちが大変心配された、ある書物に記されている。

このような法然上人晩年の持病も湿気の多い比叡山で長らく修行生活を送られたことが原因ではないだろうか。学問、修行はもちろんのこと生活続けることさえ生命がけであったのである。

比叡山黒谷青龍寺は法然上人二十五霊場の

特別霊場に指定され、春期から秋期にかけて多くの参拝者がある。また、青少年修練道場の施設もあり、夏期には多くの子供たちが合宿に訪れる。

しかし、冬期になると十二月上旬を境に子供たちの姿も参拝者の姿も途絶えてしまう。冬場の十二月～三月までの4ヶ月間は人の気配もなくなり、一人厳しい冬の生活に入ることになる。法然上人と私、阿弥陀さまと私の膝を交えての生活が始まる。

夜半を過ぎると毎日のように谷間から雪おこしの風が吹き上げる。気温も零下十度～十五度と凄まじい寒さである。夜、翌朝の御霊供膳（仏さまへの御食事）の準備のため台所へと向かう。ステンレスの流し台の植えにスプーンを置く。ほんの数秒の間に流し台とスプーンが凍てつき、べったりとくっついて離れない。ほんの数秒の間の出来事であった。早朝、本堂へ向かう。本堂のお供え物のリンゴやミカンがシャベットののように凍りついている。仏さまへの御供養のお花が凍りつ

き、触れるとボキリボキリと音をたて折れてしまう。何という凄まじい寒さであろうか。

一日の仕事が終わる。再び長い長い夜が訪れる。凍てつくような厳しい寒さ。横たわる長い静寂。そして、私の心に一つの思いが去来した。

法然上人は、この黒谷の地でどのようにして厳しい冬をのり越え生活されていたのか。今から八百有余年前の昔、現在のような立派な本堂ではなかった。板と板を張り合わせた、草と草を編み合わせたような荒ら屋であつた。現在のような暖房器具があるわけでもない。手あぶりする火鉢一つあるかないかの時代である。そして、この雪に閉ざされた青龍寺で一体何を食し、なにを身にまとい生活されていたことか。

法然上人の二十五年に及ぶ修行生活の厳しさが、骨身に染みて感じられた。

承安五年（一一七五）四十三歳の法然上人は、比叡山の長い修学生活の中で、唐の善導大師『観経疏』「一心に専ら弥陀の名号を念じ

て、行住坐臥に時節の久近を問わず、念々に捨てざるもの、これを正定の業と名づく、彼の仏の願に順ずるが故に」の一文により、称名念仏こそが阿弥陀さまの御心になつた御本願の行であることを確信された。

自分の力ではない。自分の行ない、自分のはからいを先とするのではない。阿弥陀さまの本願のお力によつて救われていくのだ。「念仏を唱える者を救わずにはおかない」との阿弥陀さまの本願の大慈悲の御心を法然上人は全身全霊で受けとられたのである。

法然上人のお言葉に、

慕する人は阿弥陀仏なり。慕する者とは我らなり。すでに心を一向に阿弥陀仏におこせば、早く仏の心と一つとなるなりとある。法然上人が阿弥陀さまにすべてをまかせ、お慕いされる、その心が身に染みて感じられる。若き青年僧、法然上人が仏を信じ身をなげされたお姿が臉に浮かぶようである。

法然上人がすべてをまかせ、お慕いされた

仏さまこそが、五劫の思惟と永い間（兆載永劫）の修行の結果、仏となられた、血の通うが如き報身の阿弥陀さまなのである。血の通うが如き、ぬくもりをもった阿弥陀さまであるからこそ法然上人は、阿弥陀さまの大慈悲の御本願を信じ、念仏の一行を選びとられたのである。

法然上人は私たち凡夫の為に比叡山で厳しい修行をして下さった。私たちに代わって生命をかけて修行をして下さったのである。

その御苦勞の末、頂かれた所の御教えとは、永い永い修行の結果、仏となられた阿弥陀仏であり、阿弥陀仏の大慈悲の御心である本願に基づいて完成された西方極楽浄土こそが私たちの目指すところであり、助け給えと、ただ南無阿弥陀仏と本願の念仏を唱えるばかりの尊い教えである。

法然上人の比叡山での御苦勞を考える時、私たちお念仏の信仰を頂く者は、法然上人お示しのそのままの阿弥陀さまを深く信じ、西方極楽浄土をひたすら憧れ、阿弥陀さまの御

名を呼び続けるより、法然上人の御苦勞に報いる道はないのである。

（愛知・栖了院 副住職）

天野信浩（あまのしんこう）

京都に生まれ京都で育つ。花園大学（臨済宗の大学）を卒業後、恩師・知友の薫陶を受け得度出家。

当時大学には、故・大本山鎌倉光明寺法主藤吉慈海先生、真宗大谷派浄泉寺住職・吉田清教授がおられた。恩師の浄土の御教えに対しての真摯な姿勢にうたれ、浄土宗法儀師・佐藤淳学師のもとで得度出家する。

その後、元祖法然上人をお慕いする心より、総本山知恩院 御本願・比叡山黒谷青龍寺とその道をあゆむ。そして、平成三年五月三河の地、渥美半島に仏縁を結ばせていただくこととなった。

現在、総本山知恩院常任布教師

大本山増上寺本山布教師

大本山金戒光明寺布教師

御法語に聴く

地体ぢたいは生きとし生けるものは
過去の父母ちち ははにて候なれば、食う
べき事にては候わず。

『往生浄土用心』

慈と悲のはざまには

五月の連休、柄にもなく、寺の客殿の玄関先にかすみ草の種をまいた。数年前、地元のガス会社のキャンペーンで配ったものらしいが、引き出しの奥から出てきたのである。全くの気紛れだったが、まいてみると、いつ芽が出るのか気になる。芽が出たら今度はいくつ出たか気になる。少し大きくなった頃、出入りの庭師がそこに見栄えのする木を植えようと言った。かすみ草の苗をあわててプランターに植え替え、水や肥料をやり、なるべく陽が当たるように時間によってプランターを移動する。外から帰ると、今日はどのくらい伸びただろうかと確かめる。これが妙に快いのである。

炎天寺というお寺が毎年、全国小中学生俳句大会を主催している。その小学生部門の特選句に

じてんしやを みがくときゆつきゆ うれしなき

という句があつた。自転車に対する慈しみは輝くような瑞々しさだ。万分の一かも知れないが、私の快さの原因もその慈しみのせいかもしれない。しかし、慈しみが深ければ深いほど切なくも悲しい現実が待っている。

ぼくの牛　ふりむきながら　売られてく

同じく特選句だ。食用として売られていくのだろう。何か峻厳じゅんげんな真理を見ているような気さえしてくるのだが、私たちはその峻厳さを敢えて無視することが多い。

最近、旅行したときのことだ。新鮮な海の幸を求めた能登の温泉。お膳には蓋のついた深い器が一品。開けてみると、活きのいい車エビが悠然と泳いでいた。しばらく躊躇はしたものの、むんずと捕まえ殻を剥むき、ペロリと口に入れた。そのあとは「剥むいて差し上げま

すよ。これがおいしいんですよ」などと言いながらご同行のご婦人の方の世話を焼くのであった。旅行から帰ると、早速ランタンの前に腰を降ろし、かすみ草の伸びた葉を撫でている。車エビとかすみ草、何かが臍に落ちない。そう感じながら、冒頭の法語が頭に繰り返されるのである。

私たち「生きとし生けるもの」は姿形を変えながら輪廻転生を繰り返してきた。これは仏教の大前提である。確かに、この肉体は両親から頂戴した。しかし、この迷いの世界に存在すること自体、その時々のご縁に依っている。動物や魚や鳥や虫や植物であったとしてもおかしくはない。むしろ、生きとし生けるもの、森羅万象のすべては、遙か過去の世から深い絆で結ばれ、各々の心の奥底では、まだ、ちゃんとつながっているのだ。だからこそ、自転車か「うれ

しなき」をし、牛が「ふりむく」と感ずるのであろう。その時々
育んできたご縁が、小さな慈悲となって現れる。そう言ったら言い
過ぎてあろうか。

法然上人は、肉食に関する物忌みについて「さもや候わん」と述
べたのち、「地体（本来）は……」と続けている。過去世の父母とは
いえ、私たちが生物である以上、生きとし生けるものを食べざるを
得ない。娑婆には、堪え忍ぶという意味がある。峻厳な現実を見据
えよということだろうか。慈悲と輪廻転生をはさんで表と裏なのだ。
この娑婆だからこそ、生き物を食するという行為と、三度の食事を
おいしく、感謝をもっていただきたい。

（浄土宗総合研究所研究員・袖山栄輝）

表紙は語る

野草花ごよみ

8月

クサフジ

(マメ科)

道ばた等にはえるつる草。美しく目につくが、写真映りの悪い植物で（人間でもそういう人がいる。失礼。）、特に色が思うように出ない。この写真はある程度満足のゆくものを写せたものである。名は草本で花のつき方がフジに似ていることによる。

撮影場所 埼玉県浦和市



もうひと花

ガガイモ(ガガイモ科)

道ばたや野にはえるつる草。毛がたくさんはえたひとてのような花を咲かせる。ありふれた植物であるが、どういふわけか10数年出会わず、やっと再会した時、自分の気に入った写真がとれたという因縁の植物である。

撮影場所 埼玉県浦和市

お詫びと訂正 先月号の「もうひと花」でギンリョウソウとあるのはギンリョウソウの誤りでした。ここに慎しんでお詫びし訂正させていただきます。
(編集部)

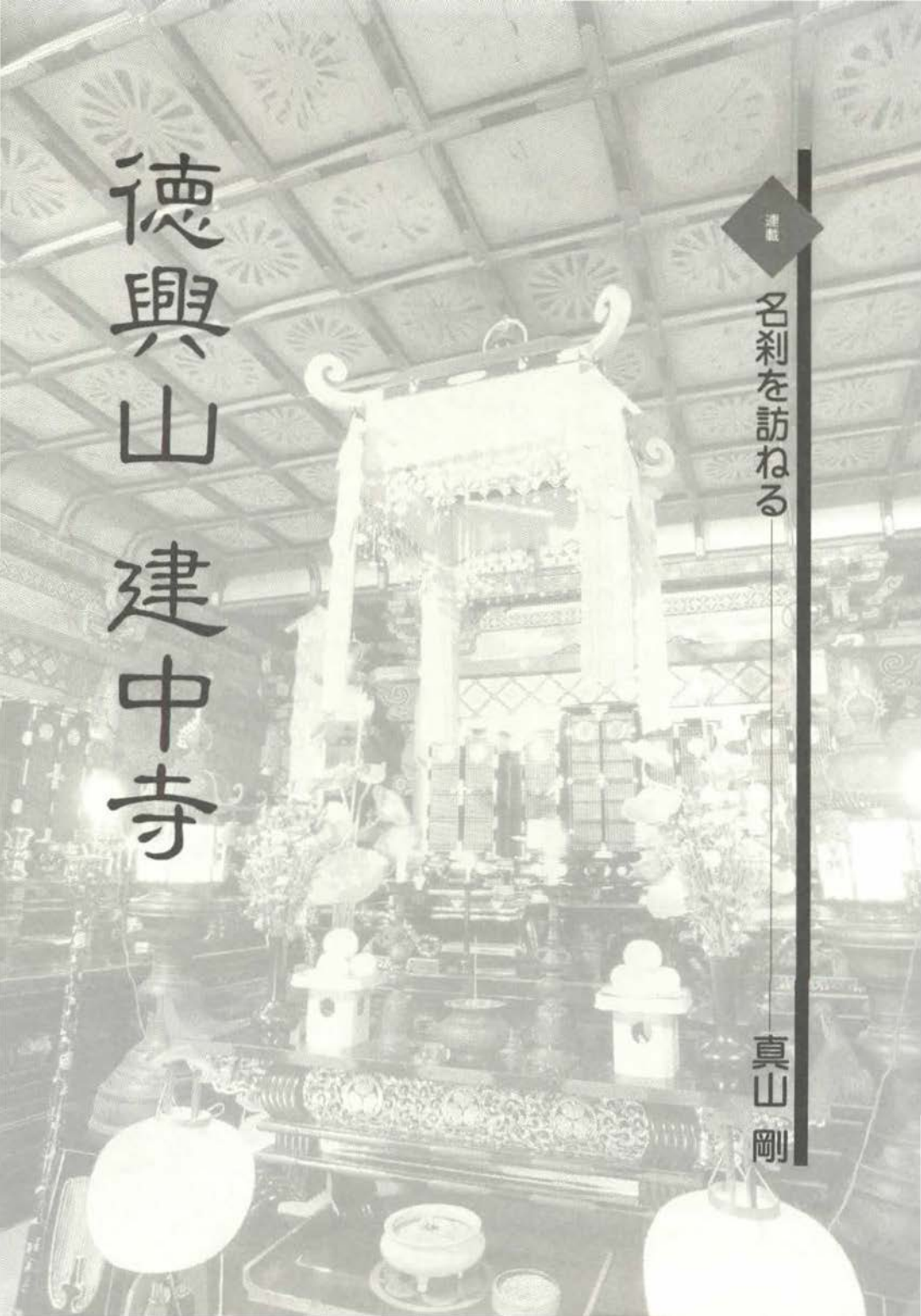
表紙Photo/Report
石井敏之

連載

名刹を訪ねる

真山 剛

徳興山 建中寺



「名古屋は昔からお上のいうことは何でもよく聞く土地柄」。

名古屋駅から車で718分、市庁の並びに建中寺の山門は聳える。昭和四十四年に信州の飯田からこの建中寺に入った村上賢瑞住職によると、名古屋の土地柄はこの一言に尽きる、という。

ご存じの方も多いと思うが、名古屋は百メートル道路、五十メートル道路が縦横に走る街だ。名古屋駅を中心に本当に幅の広い道路がかなりの広範囲に延びている。この道路は終戦直後に整備されたというが、そのいきさつをご存じだろうか……。

名古屋市戦後の市長は小林橘川さんといい、滋賀県の浄土宗の僧侶から、名古屋で新聞記者、そして市長になるという経歴の持ち主だ。当時は内閣も社会党の片山 哲首相率いる時代で、この名古屋の小林市長も社会党だった。そしてこの市長の助役がなかなか荒っぽい人だったという。この二人は焼け野原となった名古屋の街並みを徹底的に整備しようと道路の拡張に踏み切った。道路予定地はその所有者を問わず移転、立ち退きとなった。

実は愛知県は日本で一番お寺の多い県なのだが、その県庁所在地の名古屋にもお寺は多い。道幅が百メートル、五十メートルの道路予定地には当然多くのお寺の境内が、そして墓地がかかる。そこで墓地を一カ所にまとめよう、ということになった。それなら道路予定地以外のお寺の墓地も一緒にということになり、市内のお寺とい

うお寺から墓地が集められ、平和公園をはじめいくつかの合同墓地が整備された。だから名古屋市内のお寺の境内には墓地がない。もちろん建中寺も例外ではない。五万坪あった境内は、墓地どころか山門の前にも道路が通ることとなり、山門から総門までの敷地は現在市の公園となっている。こう聞くと、整備という名目とはいえ、相当の荒療治だ。現在の交通事情を考えると、結果的には先を見越した決断と実行力といえるだろうが、この荒療治に大きな反対運動が起こらなかった。なぜなら名古屋はかつての尾張藩、徳川御三家のひとつであり、歴史的にお上のいうことには従順という風土が大いに残っているからなのだろう。

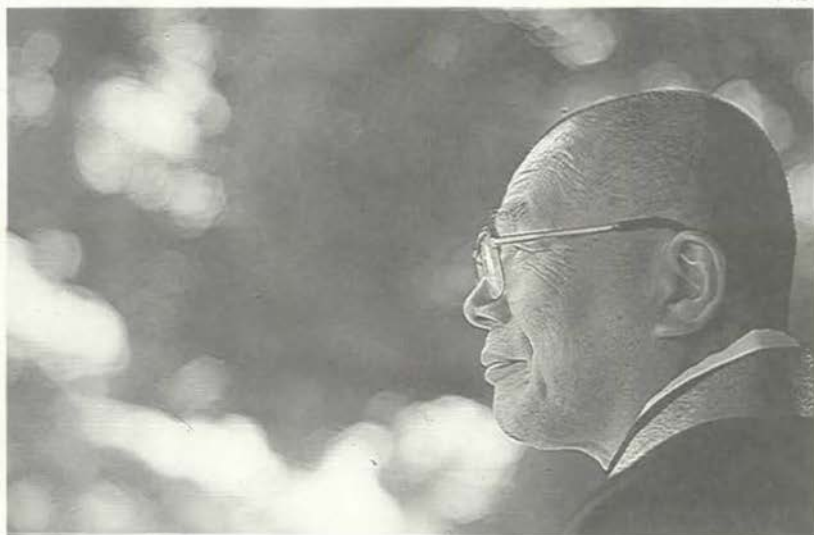
さて、この建中寺は慶安四年、一六五一年に尾張藩主徳川光友卿が慈父義直公の菩提をとむらうために建立した寺で、義直公は徳川家康の九男で、初代尾張徳川家藩主。光友卿はその長男である。

本誌のグラビアを飾る写真は、御霊屋（おたまや、と読み霊を祀る御堂）の内部で一般には公開されていない。徳川家の江戸での菩提寺、増上寺にも御霊屋はあったが現在に残っておらず、浄土宗のお寺で御霊屋を今も残す所は少なく、とても貴重なものだ。またこのほかにも徳川ゆかりの品々は多く、不動堂には家康の念持仏（ねんじぶつ）の勝軍不動もある。これは昭和五年に尾張徳川家から建中寺へさずかった不動明王である。

総門から山門までは公園になっている



律師養成講座の修了者の中には
村上住職を師と仰ぐ僧は少なくない



こう見るとさすが徳川御三家の筆頭尾張藩の中心となるお寺、なのだが、今回の取材目的は尾張徳川家の菩提寺としての建中寺だけではない。お坊さんを養成する修行道場としての建中寺である。

壇信徒のわれわれは知らないが、浄土宗の僧侶になる最後の修行を加行という。行を加えると書き、けぎよう、と読むそうだ。この加行は京都の総本山知恩院、東京の大本山増上寺で行われる。この行を受けると浄土宗の僧侶になれるのだが、受けるにはそれなりの修行と勉強が必要で、その方法は三つある。

一つ目は浄土宗関係の大学に通い、勉強し修行する。

二つ目はこれも大学だが、通信教育で勉強、修行する。

(もちろん修行は通信ではなく実際のお寺に籠もる)

三つ目は養成講座といわれる短期集中の講座で勉強、修行する。

このどれかを修了した後、はじめて加行を受けることができるのだそうだが、建中寺は三つ目の養成講座の道場で、この養成講座には大学に入学した人向けの少僧都養成講座と、義務教育を修了した人向けの律師養成講座がある。建中寺はこの律師養成講座の修行の地なのである。

もともと浄土宗は僧侶の育成、教育には熱心な宗派で、明治十九年と二十年に現在の中学、高校にあたる学校を、東京、仙台、名古屋、長野、京都、大阪、山口、久留米の八か所に設立。明治三十四



東海中・高校の正門

浄土宗の宗門校

浄土宗の宗門校（かつての支校）は合併もあり、現在五校となった。東京の芝、名古屋の東海、京都の東山、大阪の上宮、熊本の鎮西だ。東海中学、高校の前身である浄土宗学愛知支校時代は建中寺の塔頭（お寺の中に建てられたお寺）である正信院境内に校舎があった。初代校長は武田御前と呼ばれた尾張国中島郡片原一色村善応寺住職の武田芳淳先生。武田先生はいつもねずみ衣に茶袈裟といういでたち。また生徒も黒衣に袈裟の姿で、お坊さんでない一般の先生だけか和服か洋服を着ていた。僧侶の育成を目的に設立された浄土宗学愛知支校はお寺からの課金で運営されていたが、教育費も不足がちで、明治33年、忠魂祠堂が日清戦役戦没者の慰霊として建てられたが、その祠堂金が教育費に使われたりした。この忠魂祠堂は台風で倒壊したが、今は明照殿となり、その伝統は引き継がれている。

年に一般教育機関としての普通の中学校になるまでは、どこも浄土宗の僧侶を育成するための一宗学校だったという。名古屋の学校は「浄土宗学愛知支校」として明治二十一年に県知事より認可され、翌年、西蓮寺の境内に校舎を建てた。がその翌々年、濃尾大地震で倒壊、翌明治二十四年に建中寺境内に校舎を移転した。当時の学区は愛知、静岡、三重、岐阜の四県と長野の一部で、その学舎で学び、後に同校の校長も務め、建中寺、増上寺の住職をされた椎尾弁匡という有名なお坊さんを始め、「浄土宗学愛知支校」は数え切れない僧侶を輩出してきた。その後、普通の中学、高校となつてからは、僧侶育成の学舎ではなくなり、現在は仏教系の学校

ではあるが進学校の東海学園として全国に知られている。

こうした中で昭和三十五年、建中寺で律師養成講座が開かれることになったのである。律師養成講座は毎年七月の終わりから八月にかけて行われるが、講座の責任者、所長は東海学園の校長、そして副所長は建中寺の住職と決まっている。だから村上住職はかれこれ三十年近く律師養成講座を見てきているわけで、学校の校長は変わるが、住職は変わらないので実際は村上住職が受講者のあらゆる面倒や相談にのることになる。

村上住職はゆっくり噛みしめるように話した。

「律師養成講座を受ける方は大きく二通りにわけられます。一つは求道心、人生の半ばにしてお坊さんになりたい、と自らの発願で来られる方。いま一つは、頼まれ坊さん。つまりお寺に生まれ、親である住職から、『頼むから坊さんの資格だけはとっておいてくれ』と頼まれて来た寺の息子たちです」

村上住職、最初から核心にせまってくれる。

「本来僧侶というものは、各お寺で育てるものです。法然上人の教えを、浄土宗の教えを信する者がお寺に入り、住職はその弟子たちを一人前の坊主に育てて行く。そういうものなのです」

ところが、実際はこうはいかないらしい。以前は十五、六人ぐらいだった律師養成講座の参加者が現在は八十人を越える。もちろん



経蔵には輪蔵の回りに十三宗の相師像が並ぶ

普通の人で仏道に入る人も増えているが、昭和四十年ごろから住職の言うところの頼まれ坊主が増えてきたということである。

「本来は僧侶の育成は宗の学校、以前の中学、現在なら大学が果たすべき役割です。ですから私も佛教大学や大正大学の先生にお話し申し上げるのですが、皆さん学会やらなにやらで、お話しは聞いていただけても、なかなか実行には移せないようです」

村上住職、毅然と言いつつ。僧侶や先生には耳が痛い。

正論が通らない昨今の世情とはいえ僧侶の世界も同じかと少し驚いたが、気を取り直し実際の律師養成講座の様子を聞いてみた。

「律師養成講座の律師とは浄土宗の僧侶の僧階（お坊さんの位）で一番下の資格を取るためのもので、僧籍登録（得度し師僧について登録）と義務教育修了が条件。期間も三週間を二回、二年間と加行への一番の近道。それだけに在家（一般人）も多いのです。会社勤めにしろ、自営業にしろ、仕事をしたいばそうそう休みはとりにくいですから、少しでも短い方がよいのでしょう。」

講座は朝の掃除、勤行からはじまり、宗乗（浄土宗の教え）や余剰（その他の教え）、伝導学などの勉強、読経や礼拝、仏具の取り扱いなど実践はもちろん食事の時間もふくめ、一日中修行です」

一番下の位のお坊さんといっても、修行は大変そうだ。毎年必ずノイローゼになって途中で脱落する人がいるという。またノイロー

建中寺の歴史と寺格を表す四脚門



ぜとは関係なく逃げ出す人もいる。名古屋の暑い夏のせいもあるの
だろうが、目的は同じでも見知らぬ人と十人〜十五人一部屋の生活
は気も使うだろう。講座の受講者は年代もばらばらで、七十歳を越
える人もいる、もちろん職業もまちまちだ。

誤解のないように付け加えるが、逃げ出す人は数人。一途な信念
に修行を積む人も多い。部下の菩提をとむらうために定年後に入っ
た元陸軍中尉は、足が悪く正座ができない。浄土宗のお念仏は正座
して称える。これでは修行ができないと自ら下山、入院し足を完治
させてから再度入山、僧侶となり部下の菩提をとむらっているとい
う。また、同部屋仲間が同じ班のお年寄りをみんなてかばいなが
ら、無事班全員が修行を終えることもよくあるそう。修行とはい
え、様々なドラマが起きてきたのだろう。

今回はお寺の紹介は巻頭グラビアにゆずり、お坊さんの世界を垣
間見ることになったが、どうしてもなかなか大変そう。お坊さんも
人間、煩惱も邪心もある。だからこそ修行に励み、ここを養う。

話を聞きながら、以前菩提寺の住職から椎尾弁匠上人の句と教わ
った短歌を思い出し、修行僧に、と心の中で詠んでみる。

ときはいま　ところあしもと　そのことに

うちこむいのち　とわのみのち

(ルポライター)

今年も高校野球、夏の甲子園大会の節を迎えました。一投一打にける球児たちの進る情熱は、我々大人が何処かに置き忘れてしまってきた（かもしれない……）大切なものに気づかせてくれるようです。

奇しくも（？）甲子園で熱戦が繰り広げられているのときを同じくし、実は我々僧侶も、熱戦を展開、否、熱読、しております。そう、月遅れお盆のお棚経の真最中なのです。

この時期は都会に暮らすお子さん方も帰省しており、お檀家さんはどこのお宅もお孫さんや親戚やらで賑わっております。日本の夏を象徴するに余りある大切な風景に出会え、伺ったこちらまで楽しくなってきた。

若和尚の

十七其なしはいいットヨチ

です。決してそこに水をさすつもりではないのですが……。

「ごめんください。○○寺です。」「……」（あれ、玄關開いているし、テレビもついているに留守かな？）「ごめんください」（奥の方の妙な哄きの中から）「はあい」。そうです、甲子園スタンドの応援団に勝るとも劣らない声援が、テレビの前に参集した家族から迫力満点の画面面目がけて投げかけられていたのです。こちらも野球は好きですから、お家の方との会話もついついその話題からスタートしてしまいがちになります。そこまではいいのですが、いざ、読経が始まってもボリウムにいささかの变化も起さないばかりか、応援の声は愈

愈高まる一方、ということが少なくありません。更には家族が大勢いらっしやるにもかかわらず、お仏壇の前にはおばあさんやおじいさんだけ、ということが案外多いのにも驚きます。

「仏さんのことはおばあさん、おじいさんの役割」という考え方がどこにあるのかもしれません。が、どんなものでしょう。ご先祖を供奉することの大切さ、命の尊さといったものを皆んなでかみしめること、そしてそれらを若い人たちに伝えてゆくことが、一つ、お盆の大きな意義ではないでしょうか。テレビのスイッチを切るほんの十分間、一イニングが、世代、時代を超えた、かけがえのない価値へと昇華されるはず。〔正〕

GERMANY

外国で
生活して
⑬

Universitäts- Stadt

鐘 キリスト教に与えた
インドの影響

大正大学講師
東京・長松寺住職

西村実則

Göttingen

大学のインド学研究所から徒歩二十分のところの下宿があった。四階の最上階はいわゆる屋根裏部屋で、ここには三人学生が住み、地下一階の半分（残り半分は倉庫）がわが宿である。もっとも、この家はなだらかな斜面に位置するため、地下といっても部屋はよく手入れされた芝生の裏庭に面していたから暗くはない。

窓は真冬の夜になるといつも気温が零下十度くらいにさがるため、防寒用の二重窓である。静かな街ながら、この窓をおして定期的に聞こえてくるものがある。教会の鐘の音である。

ドイツではどんな小さな街でも教会と市役所の高い建物がひととき偉容を誇っているが、まず大学が設立され、その後、街として発達してきたゲッティンゲン市も例外でない。大学、研究所の建物は市内いたるところにあるものの、市の中心部にはヨハネス、マリーエン、ヤコービという三つの教会が聳え立つ。下宿から聞こえる鐘の音は三時間おき位に

あちこちの教会から、それも一斉に響き渡り、教会の存在を無意識に実感させる。

下宿の奥さんの話によると、ドイツでも若者の間ではやはり信仰心が薄れつつあり、日曜でも教会に行く人が減少傾向にあるという。それにしても、街全体を包み込むように交響する鐘の音は、日本の仏都というべき京都の比ではない。信仰心の有無、深淺にかかわらず、自然と心に迫るものがある。「無量寿経」に、珍妙の花を天から雨降らす（當雨珍妙華）とあるが、鐘の音は天上から降り注がれる花の感がある。

私の先生（グスタフ・ロート）はインド文献学、言語学を専門としておられるが、仏教と同時代にインドに興ったジャイナ教にみられる鐘の役割について、私が滞在中、フランスのストラスブールで研究発表される機会（一九八一年六月）があった。

ストラスブールはドイツとの国境沿いに位置し、アルザス州の州都で、過去に幾度とな

くドイツとの争いでその帰属の変った地域である。

第一次大戦後、ここがドイツ領であった時、ドイツ語でいうシュトラースブルク大学に当時のドイツを代表するインド学者が教鞭をとっていた。その名はエルンスト・ロイマン。

この学者のもとに留学したのが浄土宗の渡辺海旭、荻原雲来の両師である。伝聞によると、渡辺海旭は奔放、広汎にしてドイツ人とビールをまじえ世界の風潮を論じた。一方の荻原雲来は寡言、細心、篤実。同時期に下宿を共にした。とりわけ荻原氏は下宿で勉強し、下宿にいなれば大学の図書館でつねに勉強する姿はドイツ人の間でも有名であったという。

渡辺氏は帰国後も、『大蔵経』の編纂でその名は世界に轟き、また荻原氏の学的功績は拔群で、当時はむろん、現在でもその着実な原典研究の手法は他の追隨を許さないものがある。国際ジャイナ教学会が開催されたのは、両師の学んだこの地である。

このストラスブルには高さ百四十二メー

トル、ゴシック様式の壮大なノートルダム大聖堂（バリのものと同名）が街の中心部に屹立する。現在でもストラスブルといえは、この教会が観光名所の第一にあげられる。私はジャイナ教を専門としないゆえ、その学会に参加しなかったが、その後、渡辺、荻原両師の余薫にあづかりたく遊山に出かけたことがある。

市内を流れるイル川に面して柳並木があったり、木を柱とする中世ドイツ式の古い建物の残る美しい街である。ストラスブル大学の正面にはこの地でも学んだゲーテ、校舎の前面上部には医学のバストゥール、数学のガウスなど六人の立像が学ぶ。これらの像にゲーテ、ガウス（ゲッティンゲン大教授であったことは後日知った）などドイツ人の像のある点は、開かれた大学であることを強く印象づける。

ノートルダム大聖堂はみやげ物店の列が途切れたかと思うと、突如として眼前に拡がり、そのスケールの大きさに思わず歓声をあげた。

屋上まで三二九段の人一人がやっと通れるらせん階段を昇ろうとして途中足がすくみ、やつの思いで行きつき、市の全貌を見渡したことがいまも蘇る。

しかるにストラスブル第一の名所であるこの大聖堂について渡辺海旭、荻原雲来両者ともに、何ら関心を示した形跡がない。この点で明治の時代における両師の毅然とした学問的、信仰的使命が熱いほど伝わってきたことを思い出す。

ところで、キリスト教と仏教との単なる比較から一步踏み込んで「キリスト教祭式に及ぼした仏教の影響」ということが、今世紀初頭以来ドイツの学者（リヒャルト・ガルベ）によって論じられてきている。そうした研究はわが国でも中村元博士によって紹介（「インドとギリシャの思想交流」）されている。その紹介を列記すると、こうである。

一 仏教の僧院が男僧と尼僧から構成され、おのおの独身、禁欲の共同生活を送ることはカトリックでも同じである。

2 儀礼の上で、仏教・カトリックともに

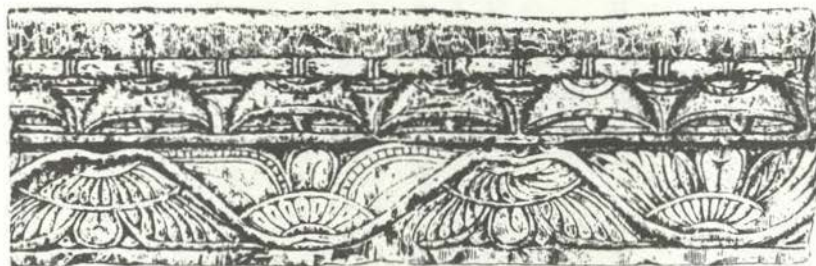
墨染めの衣をまとい、数珠を爪繰り、灯明・ローソクを献じ、香をたいて合唱する。数珠はサンスクリット語で「念誦の輪」とあったのが、誤伝して「ばらの輪」と伝わり、それがロザリオである。両手を合わせて合掌する作法も、キリスト教の母体であるユダヤ教には見られない。

3 聖者の遺骨を崇拜することは、キリスト教に本来なかった。それが行なわれるようになったのは、仏教の影響である。

4 インドでは祭壇の回りを右肩を向けて（左は不浄）、三回まわる儀式を行なうが、ギリシャ正教でも同じことをする。カトリックで右まわりを一回だけするのは、それが単純化されたことによる。

リヒャルト・ガルベによると、仏教からの影響としてそのほか剃髪、告解（懺悔）、塔の釣鐘もあげている。この鐘に関する中村先生の見解は仏教、キリスト教に共通するものと

ジャイナ教ストゥーパの鐘の彫刻



はいえ、初期の仏教、キリスト教には本来なかったものとされるにすぎず、それが仏教の影響とはつきり明言しておられない。

ロート先生の研究は、鐘は仏教に限らず、古代のジャイナ教でも用いていたことを論証された点に大きな意義がある。すなわちジャイナ教でもストゥーパ（卒塔婆）を重視し、釣鐘の列をなす彫刻があること、また、ジャイナ教の文献にも塔を多様な五色の鐘と旗で飾りつけるとある点である。

ただ、ジャイナ教はインド以外には伝播しなかった。これに対し、仏教は北西インドから中央アジアに広まるにつれ、その釣鐘付きの塔がキリスト教徒の眼にとまった。

さらにキリスト教はイラン、アルメニア、中央アジアへと伝播し、鐘については当初異教徒の騒々しい鳴り物としか思われなかった。それが、六世紀以後になると、一転して採用されるようになったという。ドイツ中世史学者の阿部謹也氏（現一橋大学長）も近年、教会の鐘に注目され、それは六世紀にヨーロッパ

バに伝わったものとされる（「蘇える中世ヨーロッパ」）。しかし鐘がどこから伝来したかは明記していない。

ストラスブルでのジャイナ教会に参加した日本のジャイナ学者（淑徳短大の渡辺研二氏）によると、中村先生は当日のロート先生の発表にいたく感動されていたという。

二年の滞独生活を終えて帰国する際、この鐘に注目しつつフランクフルトからデリー行きの直行便に乗った。行き先はヒンドゥー教の聖地ベナレスと釈尊初説法（初転法輪）の地サールナート。

ベナレスではガートの近くのヒンドゥー寺院に鐘はたしかにあった。建物の外壁に伏せ鉢形で吊され、その中に叩く棒のついたもの。サールナートではジャイナ教寺院があり、やはり建物の最上部に釣鐘と並列した釣鐘の彫刻まで実見することができた。この点、仏教の場合、どうであったか。

『般若経』、『法華経』（見宝塔品）という大

乗経典には、塔にやはり鐘（言語のガンターは捷稚とも訳される）を取り付けたことが明記されている。パールフット出土のストゥーバでも、はっきりその彫刻の上に鐘を認めることができる。

鐘は塔に設置されるばかりでなく、僧院生活上、重要な役割を果たしていたことが初期仏教以来多くの仏典から知られる。原始経典の一つ『増一阿含経』には大乘教徒による加筆があるといわれるが、仏弟子の阿難が堂宇に昇って、

われいま如来の信の鼓を撃たん、如来の弟子たちことごとく集合すべし。

と、鐘を叩いたとある。弘法大師の『性霊集』にも、一たび鐘を打てば三千世界の人衆、雲のごとくあまつというのも同趣旨である。

そのほか鐘は『読経』『食事』『入浴』『死亡』『水難』『火災』に際し、集合の合図として盛んに使用された。遠くまで聞こえない場合は、

高処で打つべきであるとする律典(『十誦律』)もある。このくだりは塔が建てられる頃になると、さっそく鐘が設置されるいきさつを示すものといえよう。

わが国では『平家物語』の冒頭に、「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり」と、祇園精舎には鐘があり、それが鳴り響くとあることは広く知られている。しかるに、この句は恵心僧都源信の『往生要集』がその出典となり、さらにその由来をたどると中国唐代の道宣作『祇洹図経』に起因することも近年明らかにされている。

『祇洹図経』は道宣がインドの祇園精舎の伽藍配置を再現し、諸堂にはことごとく鐘のあることを描写する。とりわけ無常堂(院)にある鐘は、「諸行無常……寂滅為樂」の教えを説き、身も心も病む者がその音を聞けば、苦が除かれ、清涼の樂をえ、三昧の境地に入り、まさに浄土に生まれるであろうと示される。もともと祇園精舎の諸院には鐘があると

いうのは事実でなく、道宣の仏教信仰にもとづく着想であることは、落合俊典氏のすぐれた研究(『道宣の鳴鐘信仰』、『華頂短大研究紀要』三十)によって知ることができる。

教会の鐘のルーツすらインドであるという見解はわが国で知る人は少ないであろう。ドイツのインド学者たち、とりわけロート先生によるそうした全く新たな視点からの研究の場に居あわせたのも僥倖であった。



ストラスブール大聖堂前にて
(中央が筆者)

子供のとき親にしかられるたびに、「もうこんりんざいしません」と言った記憶のある人は多いかと思いますが、この言葉が「金輪際」と書いて、しかもそれが仏教の言葉であることを知っている人は、意外と少ないのではないのでしょうか。

私達が今、この言葉を使うときは主に副詞として、底の底までとか、あくまでもといった意味で使うわけですが、この底といった場合、それが何の底であるのかということについて、私

達はあまり深く詮索せずにいたようです。

仏教の宇宙論に依れば、宇宙の最下には虚空があり、その上に風輪があり、その上に水輪その上に金輪こんりんがあるとしています。そして山・海・大地などはこの金輪の上に安立していると説いているのです。そしてこの金輪の真中にそびえているのが須弥山という山です。この須弥山は仏教では世界の中心を指し、しかも中腹には四天王が住み、頂上には帝釈天が住み、月と太陽

金輪際

こんりんざい

が中腹を回っているものとされている山です。そしてその山を中心として、九つの山がその回りを取り囲み、山と山との間には八つの海があり、一番外側の海には東西南北のそれぞれに島があつて、我々の住んでいるのはその南の島である閻浮提たんぶだいという島だと言うのです。

つまりこれ等すべてが形成されているのが金輪で、その最も下の水輪との境を金輪際こんりんざいというのです。まさに地のはての意味なのです。

京都一千年の歴史に

育まれた巧みの技

京仏壇・佛具は当店に!!

〒615 京都市右京区

西京極南衣手町七四

(株)島津法衣佛具店

☎〇七五―三一四―七七六八

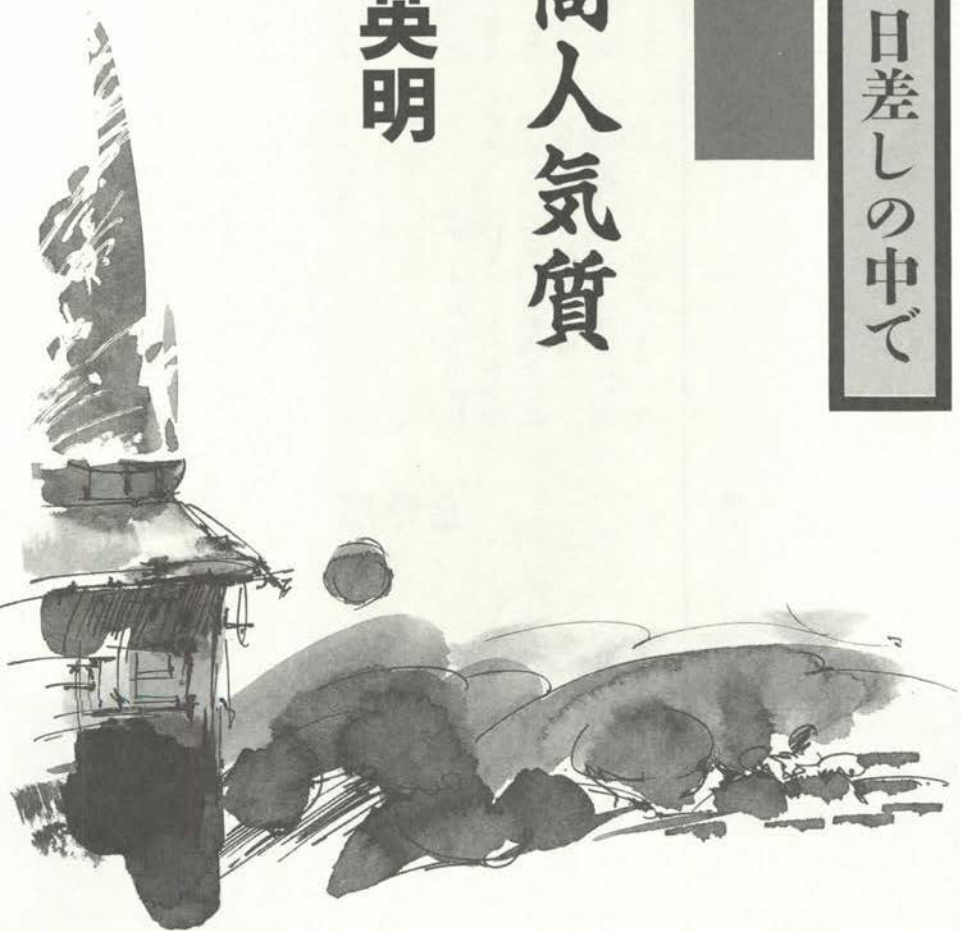
☎〇七五―三一五―三七五三

続

午後の日差しの中で

商人気質

吉川英明



もうしばらく前のことになるが、テレビの食べ物番組で、物凄い店を見た。

東京のラーメン屋である。美味しいのだそう。夕方からの開店なのだが、小さい店なので、毎日開店三十分も前から行列が出来る。

店の中では、店主が真剣な面持ちで味見をしながら、スープ作りに余念がない。

ここまではいい。こつちも嫌いじゃないから、出来上がりつつあるスープが、どれほど凄いスープであるかというリポーターの説明を聞きながら、どんなラーメンが出来るのかと固唾を吞んで見守った。

ところが……ところがである。開店時間になったというのに、店主は店を開けない。苦虫を噛みつぶしたような顔をして、

「今日は、駄目だ……」

と吐き出すように言う。

スープの味が思ったように上がらなかった。今日、今日は店を開けないというのだ。表で行列している客には、ちよつと顔を出して手

を振っただけで、びつたりと入り口の戸を閉ざし、折角作ったスープをテレビカメラの前で全部捨ててしまうのではないか。

呆れて、腹が立った。この親爺は、表で長い時間並んで待っていた大勢の客を、一体何だと思っているのだらう。

並んで待ってくれている客に、出せないようなスープを作ってしまったのなら、飲食店主としてプロ失格だが、それはそれで愛敬がある。

この場合はそうではない。スープとしては世間並み以上の出来なのだが、自分としては納得できない。だから今日はラーメンは作らない。帰ってくれというのである。これを傲慢無礼と言わずに何と言おう。

その上、気に入らないのが、テレビのリポーターの態度だ。頑固一徹のご主人のスープへのこだわり方……これぞ、究極のラーメンだなどと持ち上げている。

冗談じゃない。

もしも、それほど自分のスープに誇りを持ち、納得いかない物で商売したくないのだったら、並んでいる客の前に頭を下げてこう言っただいい。

「お客様、申し訳ありません。今日のスープはまずくはないのですが、私としては納得出来ません。お代を頂くわけに参りませんから、ここに並んで下さっているお客様には、ただで召し上がって頂きたいと思えます。その代わり、今日はこちらのお客様を限りに店を閉めさせて頂きます」

それで初めて、自分のラーメン哲学も、客への礼も筋が通るといふものだ。

今日は駄目だと手を振られて、おとなしく帰る客も客だと思った。

ラーメンを断られたからといって、食って掛かるような大人気ない人が、この日はいなかったのかもしれないが、こんな無礼を働かれて、黙って帰るといふのが私には分からない。それどころか、

「これだから、あそこのラーメンは凄いいんだ。明日もう一度来てみよう」

とても言いたげな表情を行列の中に見て、ちよつと心配になった。

というのも、こういったテレビの影響もあるのかもしれないが、最近、客を客とも思わずに我を通したり、妙に偏屈だったりする店主の経営する店か、こだわりの味だとか、究極の逸品だとかと持てはやされる傾向があるからだ。

私も以前、そんな店に連れていかれたことがある。

下町の、結構名が通っているという寿司屋だった。この店の馴染みのKという男に連れられて、私と友人のSの三人が席に着いたとたん、何も言わないのに、穴子の白焼きが一匹ずつ銘々に出て来た。

穴子はそれほど好きではないし、それでなくとも、のっけから大きな穴子なんか食べてしまつては、後の鰯が美味くないのと思つ



イラスト・平野 稔

だが、主人は、

「ま、黙って食べてみて下さい。うちの自慢の穴子です」

と自信満々である。黙って食えとは押し付けがましいなと思いつながら、いらないと返すわけにもいかなかった。

確かに美味しいのだが、やはりちよつと大きい。一所懸命平らげてから、何かさつぱりした物をつまみたくなって蛸を頼んだ。

大振りのぶつ切りが一掴み、さつと目の前に出て来たが、ワサビが出てこない。そう言う、

「この蛸は、塩で食べて下さい。ワサビ醤油じゃ蛸の味が死んでしまう」

と言って、ワサビを出さない。

蛸を塩で食べるのは私も好きだが、その時はワサビ醤油でも食べたい気分だったのだ。

好きなように食わせて欲しいな……と思つたが、まあ、Kがよく来る店だからと我慢して、ぶつ切りを塩で齧りながら酒を呑んだ。

「俺に、トロを少し切ってくれる？」

しばらくして、隣のSがそう頼んだ。

「あ、トロね。今日はいいトロが入ってるんですけど、これは、握りて食べて欲しいんですよね。後で握りますから……他に、何か？」

表面は慇懃^{いんきん}なのだが、客の注文には言う通りに応じない。いや、客の注文に一言講釈をつけるために、そこに突つ立っているような感じなのだ。

「英明さん……」

Sが太い息を吐きながら、私に顔を寄せて来た。

「何ですか、この親爺……生意氣な野郎ですね」

Sは最前からむずむずしていたらしい。私より幾つか年下なのだが、若いころからの喧嘩好きは今でも直つていない。

私とSの険悪な顔つきを見て、一番年下のKが慌てた。

「まあ、まあ、まあ、英明さん、Sさん……」

ほら、ほら、熱いのが来てますよ。ぐつと空けて、ぐつと……」

銚子を掲げて、我々を宥めるのに大童だ。私とSは、Kの酌する酒で腹の虫を抑えながら、親爺の指図に従って鮎を食べ終わったが、本当は美味しい鮎が少しも美味いと感じられなかった。

親父が客を気に入らないと、怒鳴りつけるような店も、最近はあるらしい。

作る物や出す物に誇りを持つのは大いに結構。だが、味にかけては、俺の方が一枚上だと、客を見下ろすような親爺には虫酸が走る。こちらも俺は客だぞとふんぞり返るつもりは毛頭ないが、生業として食べ物を提供している以上、自ずからそこには分というものがあるはずだ。

そんなことを考えていた折り、先日訪れた宮崎で、宮崎交通グループ・宮交シテイの社長の渡辺綱纒氏に、すごくいいお話を伺った。昭和二十五年の話である。渡辺氏は学生で、

東京の巣鴨に下宿していた。

同じ下宿にいる同郷の後輩に、たまには肉を食わせてやると約束したものの、当日生憎と手許不如意で肉が買えなかった。

仕方なく、五十円のモツを沢山買って、工夫して鍋にしたところ、これが結構美味かった。

何しろ学生の身分である。これは安いし栄養もあると、二人でモツ料理に凝って肉屋通いが始まった。威勢のいい肉屋の親爺も、五十円とは思えないほどの量をサービスしてくれる。

そんなある日、渡辺氏がその店でいつものようにモツを注文すると、横にいた若い奥さんが、

「あらっ」

と声を上げた。

「学生さんも犬を飼ってらっしゃるの？　うちのワンちゃんも、このモツ、大好物なんですよ」

そう言われて、渡辺氏は顔から火の出るような思いで竹の皮の包みを受け取り、逃げるように下宿に帰ったという。

悪い巡り合わせというのはあるもので、しばらくして、渡辺氏がその店に行くと、また、その女性の客が居合わせた。

渡辺氏は、とっさに、

「おじさん、犬の餌ちょうだい。いつもと同じ五十円でいいよ」

と格好をつけた。瞬間、いつもは優しい親爺の顔が鬼になった。

「何をっ、犬の餌だど？ わしはな、学生さんに栄養をつけてやろうと、飛び切り上等のモツをサービスしてたんだ。犬の餌にするなら、もう売らねえ。とっとと帰れ」

そう言っ、渡辺氏の顔をはったと睨む。

渡辺氏は、自分の言葉が恥ずかし、情けなくなり、土下座せんばかりに謝った。

「分かりやあいんだ。なあ、学生さんよ。

あんた方は、将来どんな偉い人になるか分か

らねえ。もし、総理大臣にでもなってみな。

あの総理大臣は、学生時代、うちのモツを食ってたんだよって……こちとら、そう言ってみたかった。だから、いつも一番いいところを取つていたんだ。あんたが買いに来るのを楽しみにしてたんだよ」

親爺の言葉に、渡辺氏の頬を熱い涙がぼろぼろと落ちた。

その時の後輩と会々と、今でもモツの話が出るという。

いい話だと思つた。

この肉屋の親爺は、自分の仕事に誇りを持ち、分を弁え、将来のある若者をどんな上得意より大事に思つて、五十円のモツでも徒やおろそかに扱っていない。これが本当の職人氣質、いや商人気質というやつだろう。こんな親爺に怒鳴られたら、怒鳴られた方も納得する。

落語の人情噺から抜け出て来たような、こんな親爺が当節はいなくなつた。

(作 家)

「ああ、もう、いい加減にし
ろってんだ、このタコ」

海の中にいるタコさんには申
し訳ないが、新聞を読みながら
またテレビを見ながら、日に何
度もこう叫んでいる。

まったく、ここ近年の世のあ
り方は、腹のたつことが多すぎ
る。政治、経済、社会……。

人々は、いったい、何を考え
ながら日々を暮らしているんだ
ろう。これでいいと思っている
んだろうか、腹はたたないのだ
ろうか。

○
今月から、この『浄土』に紙
面をいただいた。

読者の皆さまが、爽やかな読
後感を持てるような、心あたた
まる話を目指し、机に向かった
のだが、この前に読んでいた新
聞がよくなかった。

住専崩壊について、実態「倒
産」▼決算は「適正」〆、会
計士 つぶさない方針「逆らえ
ず黙認」〆、「危機隠しに、大
蔵の影」〆（七月一日、読売朝
刊）という見出しで、住専の崩

いい加減にしろ①

壊がもつと早い時期に分かつて
いたが、会計士はそうように報
告できなかった、という理由が
記されていた。

「ふざけたことぬかすな、こ
のタコ。大の大人が正邪の区別
もできないのか」。思わず叫ん
でいた。

「そういうあなたが一番のタ
コよ。口ばかりで」と妻はの
たまっていたが、その腹立ちが
この原稿になってしまった。そ
して、いつそのこと来月からも
この腹立ちでいこう、と。（順）

おかげさまで

410
周年

伝統が支える
信用と技術



松井建設株式会社

本社 東京都中央区新川一丁目二番一〇三（〇三）三五五三・二五
東京支店 東京都中央区新川一丁目二番一〇三（〇三）三五五三・二五
支店 大阪・名古屋・北陸・北海道・東北・九州・横浜

平成八年
舞見御中署

總本山知恩院門跡第八十六世
浄土門主

中村康隆

大本山増上寺
法主

藤堂恭俊

大本山金戒光明寺
法主

坪井俊映

執事長 家田隆現

大本山善導寺
法主

藤堂俊章

大本山善光寺大本願
法主

一條智光

法然上人御降誕地廿五靈場第一番
中国三十三観音特別霊場

誕生寺

徳源岡山県久米郡久米南町里方八〇八
〒電話(〇八六七)八一二一〇二

大正大学
理事長

大田秀三

浄土宗門校
芝学園(中・高)理事長

真野龍海

学校法人 大乘淑徳学園
淑徳大学・淑徳短期大学
理事長

長谷川良昭

〒174 東京都板橋区前野町五―五―二

平成八年 舞見御中署

大本山 百萬遍知恩寺
法主

大野 忍敬

樹敬寺

山下 法文

〒515 松坂市新町八七四

神奈川教務所

教区長 森 爽海

教化団長 清水 厳矩

浄土宗宗務総長

成田 有恒

〒154 世田谷区世田谷四―七―九
大吉祥寺

函館 称名寺

〒900 函館市船見町十八―十四
電話 〇一三八〇二二〇五七四

貞松院住職

山田 和雄

〒392 諏訪市諏訪二―十六―二一

京都文教大学
京都文教短期大学
学長

大河内良孝

〒611 宇治市槇島町千足八〇
電話 (〇七七四) 二一四一〇一

浄土宗東京教区教区長
光取寺
住職

大室了皓

〒141 東京都品川区上大崎一―五―十
電話 〇三三四四二―八三八四

大松寺

酒井亮貫

〒106 東京都港区三田四―一―三八
電話 〇三三四五一―二四九四

平成八年 暑中御見舞

大願寺

神谷英敏

〒5042
電話0138
函館市銭亀町一〇一
58-3145

愚鈍院
住職

中村眞道

〒984
電話022
仙台市若林区新寺三十七
〇二二五六一六〇五七

鎌倉大仏殿 高德院
住職

佐藤密雄

〒248
電話0467
FAX
鎌倉市長谷四二二八
〇四六七二二〇七〇三
〇四六七二二五〇五一

晴雲寺住職

塚田弘導

〒254
電話0463
平塚市立野町六一五
〇四六三三二一六二三八

〒365
鴻巣市本町八一三十一

勝願寺

電話0485
藤田得三
〇四八五一四一〇二二七

横浜大光院

宮林昭彦

浄土宗梅窓院
代表役員

中島真成

〒107
電話0334
FAX
東京都港区南青山一六六
〇三三三三〇〇四一八四四七
〇三三三三〇〇四一八一〇七七

お寺は皆さんの相談所
浄心寺

小池政雄

〒113
文京区向丘二一七四

お寺は生きているうちに行くところ
ナムアミダブツのお寺

住職 樋口隆信

副住職 樋口伸生

〒986
電話0225
宮城県石巻市門脇町二五七
〇二二五二二二一六四



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

ＴＶウォッチング、紀行文その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

灰汁澄んで夾竹桃はまだ枯れぬ

本誌「フオーラム」と深き仏縁に結ばれた句誌「月天」が創刊され、その記念として七夕句会が催された。

刻 甲辰 七月六日 暮六つ

処 入谷鬼子母神朝顔市を抜け大鷲神社並びの蕎麦屋角萬

兼題 虹

他七句

参加者 秋谷菊野 井口吾郎 井口栞 遠藤博史(東行)

大畑等 笠井亞子 近藤啞々砂 近藤十四郎

齊田仁 佐山哲郎(烏鷺) 長谷川岱潤(FAX参加)

長谷川裕 藤木芳清 古井戸秀夫(白々)

自由題

炎天やブリキの銃がぱちと撥ね

裕(五・点句)

名付けらる出目金予報は雨である

亞子(四・点句)

大空や舌を転がる枇杷の種

啞々砂(//)

一匙の蜜豆薄き闇の色

烏鷺(//)

冷麦にまぎれ込みたる虹の端
 亀有公園前派出所の燕の巢
 冷奴の角が明るいブカ跳ぶ
 さがしものまだ指にある茄子の棘
 真つ二つに割れてたちまち夏座敷
 草いきれ喪服の裾の砂ほこり
 一人身のうれし悲しき盆支度
 村中の視線集めて夏帽子
 チゴイネルワイゼン年齢不詳の油虫
 朝顔や寝呆け眼の七時頃
 夜の闇に光と遊ぶ勝閑橋
 浅き夏性の香ありし花が散り
 ひまわりを見下している愚か者
 中年を揶揄して渡る夏鴉
 夏草に埋める踵や未成年
 偕楽園梅の香りに心なごむ
 人間はなす術もなし夏の庭
 深山の朝を切りさく時鳥
 ひどり風呂無味なる梅雨に有為の面
 四畳半国王コップの虹制す
 無防備な言葉フェロモン蛾を集め
 虹の橋渡りて「昔は海」を行く
 五分刈が鬼灯鳴らし過ぎにけり
 夢うつつ枇杷の香と契りけり

(遅参・番外)

栞 (三句句)
 等 ()
 等 ()
 啞々砂 ()
 鳥鷺 ()
 吾郎 (二句句)
 岱潤 ()
 菊野 ()
 等 ()
 芳清 ()
 東行 (一点句)
 仁 ()
 岱潤 ()
 菊野 ()
 亞子 ()
 東行 ()
 吾郎 ()
 芳清 ()
 十四郎 ()
 裕 ()
 栞 ()
 (遅参・番外)
 白々 ()
 白々 ()

題詠 虹

あちこちに小さき虹出づ洗車場

芳清（五・点句）

塔婆持ち墓場を歩く虹の下

岱潤（四・点句）

虹立つやアスパラガスの栽培史

裕（三・点句）

西日さすコップの虹の薄情け

啞々砂（三・点句）

裸婦像の乳房にかかる巨き虹

菊野（二・点句）

アナログ盤まわれ虹発生装置

十四郎（一・点句）

七月の大放物線虹笑う

吾郎（一・点句）

かき氷幾百億の虹喰らう

吾郎（一・点句）

私小説瘦せ犬虹をくぐり来る

亞子（一・点句）

鍵っ子が如雨露で虹を立たせけり

白々（一・点句）

西へ行く虹の彼方に楽土あり

東行

虹出づる高きに登る息を吸う

栞

大欠伸上下に虹を渡す人

吾郎

虹描くに理論などなしトーバンジャン

等

古書店を出でて眩しき坂の虹

烏鷲

即興題詠 猫

朔太郎忌猫より弱い犬がいて 仁（七・点句）

路地裏に声だけ残し夏の猫 吾郎（六・点句）

つつじ寺黒猫の子を見失ふ 啞々砂（五・点句）

即興題詠 肥満

ひっそりとバラ咲き肥満研究所

仁 (六点句)

肥満金魚すくはれてゆく雨降るらし

啞々砂 (四点句)

炎天やずらり喪服の肥満体

裕 (//)

肥満なる豚一列に印哲流

肥満願望夏大根をはりはり食う

ボジティブに肥満であるアロハシャツ

夏の風邪フーセン頭肥満する

帰省子が一拳に肥満となりはてる

肥満児のダックスフントズズズズ

肥満体葛餅ゆらす鼻の息

この家は蚤も肥満に暮らしおり

向日葵の根掘る猫の眼三角

三毛猫に円錐形の夏来たる

草笛に情眼破られ猫逃亡

早のニユース流れて猫の舌の色

ヘッドライト不倫の猫浮きたたせ

胃下垂の猫が嚙むなり夏の草

紫陽花や猫舌のばす欠け茶碗

油照枕片手に猫さがす

猫の鈴誰が付けるか会長の首

猫じゃらしむしり尻餅つく夏野

入梅や俳人某の猫だまし

十四郎 (二点句)

等 (二点句)

栞 (一点句)

烏鷺 (一点句)

菊野 (一点句)

裕 (一点句)

啞々砂

芳清

東行

亞子

仁

等 (三点句)

仁 (二点句)

亞子 (//)

吾郎 (一点句)

菊野 (//)

芳清 (//)

十四郎

栞

肥え満ちて極道の末に五右衛門風呂
心太モツ化しつつ肥満薬

東行
烏鷺

即興題詠 バンチパーマ

海の家。バンチパーマにつむじなし

十四郎 (六・点句)

バンチパーマトラックで売るさくらんぼ

啞々砂 (〃)

日盛りのバンチパーマが歯科に入る

亞子 (四・点句)

停車場でバンチパーマの帰省待つ

烏鷺 (〃)

あさがおとバンチパーマが街闊歩

バンチパーマほどの緑陰竜泉寺

E電のバンチパーマが汗臭い

木下闇にバンチパーマのベトナム人

アルルにてバンチパーマが店しきる

ブードルをバンチパーマが連れて夏

氷売り腕にも見事バンチパーマ

炎天下バンチパーマのジャングル

吾郎

葉

芳清

東行

裕

等

仁

菊野

(二・点句)

(〃)

(一点句)

(〃)

即興題詠 かはたれ

かはたれや一生に喰う南瓜の数

裕 (五・点句)

蚊遣りの豚まだ働いているかはたれ

仁 (四・点句)

かはたれに行く先惑う夏の虫

葉 (三・点句)

即興題詠
灰

灰汁澄んで夾竹桃はまだ枯れぬ

亞子(八点句)

春の灰ゆつくり落ちて月涼し

啞々砂(六点句)

袋蜘蛛灰に埋もれし秘密掘る

十四郎(五点句)

涼しさや父の忌のため灰を買う

仁(三点句)

灰落ちて謀議の白き靴鳴らす

烏鷺(二点句)

灰の中から人工関節大旱

裕(一点句)

灰の音に都市の路地裏揺れ動く

東行

にんべんに夢と書いて夏の灰

吾郎

灰色が真ん中にある夾竹桃

等

炎天にかつおの出汁の灰汁をとる

芳清

枝豆が灰に飛び込みハイおしまい

栞

焼き芋の灰かき出してかき氷

菊野

街暑き日の黒い雨白い灰

菊野

かはたれの村かはたれの街となる

菊野(二点句)

かはたれや天道虫の星数う

啞々砂(二点句)

かはたれや買ふてくれろときくらんぼ

啞々砂(二点句)

かはたれそつねならむうゐ夏の山

烏鷺(二点句)

湯ののれんくぐる人虹むかはたれ刻

十四郎

かはたれに今日も過ぎ行くくそつたれ

東行

夏コンパかはたれ男哀しき

吾郎

誌上俳壇

耳深く熄^やまずきのふの祭笛
夕まぐれラムネの栓を抜く音も

物干の天辺あたり蜻蛉生る
風なきに花南天のこぼれ積む

あの花は三月も前か旬の桃
棚経のあと断われず茶の梯子

U・S 生
(東京)

内堀綾子
(東京)

沫澤^{まったく}
(東京)

吉野法衣店

各大本山御用達浄土宗袈裟法衣専門



〒160 東京都新宿区南元町17
TEL 03-3355-2168
振替 東京21176372

ご詠歌のことばやさしく盆の月
祭の子法被着てより落着かず

虫千やちとははとの世が見ゆる
花火師の闇の深さをはかりをり

吉田ゆきゑ (東京)

児玉仁良 (埼玉)

仏教ルネッサンス、再び
珠玉の一冊此処に復刻成る

完全復刻

『浄土』昭和十一年十一月號特輯

念佛讀本

念仏者必携の書！

執筆者一覧

椎尾辨匡
中村辨康
佐藤賢順
大野法道
眞野正順
石井教道
笹本戒淨
島野禎祥
江藤澂英

佐藤春夫
小西存祐
稲垣眞我
井川定慶
矢吹慶輝
梅原眞隆
松浦一
中野善英

(目次登場順)

平成8年4月、
堂々の刊行成る！

【特別頒価 二千円—送料込み—】

■申し込み・問い合わせ■

法然上人鑽仰会

〒105 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内

電話：03-3578-6947／FAX：03-3578-7036

事務局便り

事務局便り

●J・FORUM（浄土フォーラム）

ご好評を頂いております、皆様のためのコーナー（J・FORUM）毎月、投句、投稿を頂いておりますが、編集部ではもともとたくさんの方の作品を、お待ちしております。短歌や俳句、書評随筆や詩、身近な出来事や情報など、先の要領でほとんど応募ください。私たち編集部では、読者の皆さんと一緒に、この「浄土」をより楽しく、すばらしいものにしていきたいと考えております。

1 随筆・歌など…四百字詰め原稿用紙十枚以内

2 俳句・短歌・川柳など…二首まで

3 その他、本誌の体裁や掲載記事に対するご意見やご感想など、何なりと気軽にお聞かせ下さい。

……適宜

タイトルは自由です。投稿は随時受け付けておりますが、採否に関しては編集部にご一任下さい。また、原稿は返却いたしませんので必ずコピーをおとりの上お送り下さい。採用分については記念品を進呈いたします。

●読者アンケートのお願い

編集部では「浄土」のより一層の充実を図るために、皆様にアンケートをお願いしております。

1 六月号でもっともよかった記事。

2 今後、掲載してもらいたい記事、希望する内容。

3 法然上人讃仰会の活動として望むこと。

4 その他、ご意見、ご感想など。官製はがきまたはFAXで事務局までお送り下さい。もれなく記念品を差し上げます。どうぞご協力お願いします。

（住所、氏名、電話番号をお忘れなく）

新規会員紹介（敬称略 順不同）

講読会員

茨城 霞北組 得生寺

東京 台東区 佐藤和順

宮城 青葉区 小林啓子

宮城 青葉区 庄司まゆみ

一般会員

千葉 葛南組 法伝寺

好評
発売中
!!

お寺から檀信徒へ

宗旨布教額

家の仏壇の上に掛けるものです。
菩提寺とその宗旨がいつも
ひと目で明確になります。

数をまとめて御注文下さい。



定価：大（32.0×18.3cm）721円／小（27.3×14.2cm）412円

注文・問合せは
法然上人鑽仰会

〒105 東京都港区芝公園4-7-4明照会館内
電話：03-3578-6947／FAX：03-3578-7036



なすび胡瓜威風堂々施餓鬼壇

岱潤

施餓鬼壇を見てみると、普段は漬物ぐらいにしかならず、食卓の脇役で慎ましくやかにしている胡瓜となすびが、今日は自分たちが主役とばかり、堂々と鎮座ましましているようにしている。

野菜でさえ、その場を与えられると、表情が変わって見えてくるから不思議だ。

まして人間ならばなおさらのことだろうと思うのだが、対人間となると、自分と比較するという醜悪な心が起きるからなのだろうか、単純に評価ができなくなるところが悲しい。

そしてなすびとメロンを区別するように、人間どうしを区別し始める。こうなるとこれはもう区別ではなく『差別』だ。それは生得的差異（見えてすぐ分かる差異、人種、性別、障害等）や、出生地などのレッテルを張ることによって、弱者、少数者を遠ざけ見下すといった差別を行っている。この『差別する心』をなくすことが、人類の人格形成の歩みであつたと私は思う。

釈尊が施餓鬼会を行った一番の理由は、この差別する心をなくすためであつたと思える。差別されて当然の自業自得の存在である『餓鬼』にまで施しの心を向けるということは、とりもなおさず差別されるいわれの無いものは、当然救われなければならないという、強い心があつたと思えるからだ。

現在横行している弱者、少数者を切り捨てる心を、我々宗教者は最も憎み、警戒してゆかなければならない。それが一番の使命だろう。（長）

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤光道

村田洋一

太田正孝

石上俊教

オフィス類代表佐山哲郎

編集協力

編集顧問

大室了晴

浄土

六十二巻八月号 頒価六百元
年間費六千元

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
印刷——平成八年七月二十五日
発行——平成八年八月一日

編集人——宮林昭彦

発行人——牧田諦亮

印刷所——株式会社 平文社

写真植字——株式会社 シーティイー

〒一〇五 東京都港区芝公園四丁目四明照会館内

発行所 法然上人鑑仰会

電話〇三（三五七八）六九四七

FAX〇三（三五七八）七〇三六



使えるよなあ、こいつ。



こんどのパルサーは、 たのしい新実用主義。

- いろんな機能性に、ヨロコビがあるのが新しいのだ。それが、こんどのパルサーのたのしい新実用主義。しっかり楽し、しっかり仕事する。しっかり生活する。Mとしっかりのこれからを、気持ちよくサポートします。

これ安心

● 運転席SRSエアバッグ
システム全車標準装備。



走る走る

- 標準・マルチリンクワイドベースベンション(リヤ)。
- うれしい駆動感=1500X1(5速フロアシフト) 18.2km/h, 1000REZZO(アライマ)13速フロアシフト19.8km/h / 10-15モード燃費(運転位置基準)。

らくちん

- 上質感のある、しなやかな乗りこころ。
- ゆったり室内スペース。

ツイてる

- 新型エアコン。
- トランク、ポット等、収納性じょうず。

パルサー4ドアセダン
1500CJ-1(5速フロアシフト)

131.3万円

パルサー4ドアセダン
1500X1(5速フロアシフト)

148.4万円

上記価格にはメーカーオプション(1500CJ-1は13.1万円)が含まれており、税別です。

上記価格はいずれも全国メーカー希望小売価格(国・北海道・沖縄)

Mr. しっかり 新パルサー誕生

[Mr.しっかり] 日常ファン活用。①新パルサーの別名。②新パルサーに乗る人の愛称。

③～状態……新パルサーでたのしい人生を送っている様子。

●PHOTO「パルサー4ドアセダン1500X1」ボディカラーはブルーインジニルパールM(8 K01)。スポーツパッケージはメーカーオプション。●希望小売価格はスペアタイヤ・標準工具付。寒冷地仕様は1.7万円高となります。●保険料、税金(消費税含む)登録等に併う諸費用は別途申し受けます。●希望小売価格は参考価格です。価格は販売会社が独自に決めていますのでそれぞれの販売会社にお問い合わせください。●日産自動車 お客様相談室 全国共通フリーダイヤル 0120-315-232 ●お家は、お近くのスカイライン、ブルーバード、日産サリリー各販売会社へ。



みんな、自分の星を追いかけている。

駆けぬける 喉ごし。

息もつかせぬ爽快感。おいしいビールは、
喉をまっすぐに走ります。胸に一本の渾をつくります。
やすらぎと勇気をあたえてくれるもの。あなたの金星、黒ラベル。

サッポロ〈生〉黒ラベル

ビールは、20歳になってから。あきかんはリサイクルへ このビールは瓶・缶の製造に際し、100%再生紙の紙を、
また、瓶・缶の製造に際し、100%再生紙の紙を使用しています。 サッポロビール株式会社

